

スライド 丁番 登場！

生まれ故郷は旧西ドイツ

第二次世界大戦で敗戦して焦土と化したドイツは、寒い気候の国でもあるため、まず何よりも住まいづくりが急務でした。それと付随して、収納家具を早く大量に安くつくることが要求され、国家的プロジェクトで取り組むこととなりました。そこで考え出されたのがスライド丁番だったわけです。



スライド丁番の特徴と普及の理由

最も厄介な扉の吊込みが非常に簡単にできる上に、扉の納まり具合の微調整もできるこれらの機能が、家具のノックダウン化を促進し、また、使用材料の変化（無垢材から合板やパーティクルボードなどへの変化）、職人の減少化などの要因からも使用数が益々高まり、今日に至っています。

英語では「Invisible hinge」

なお、この丁番を日本ではスライド丁番と呼んでいますが、英語では「Invisible hinge」といい、直訳すると「見えない丁番」となります。

スライド丁番の国産化に挑戦

1960年代に日本に入って来る

旧西ドイツで生まれたスライド丁番が、日本に入って来たのは1965年(昭和40年)頃でした。当初は、それまでの丁番の概念からはおよそかけ離れたものだったため、なかなか普及しませんでした。

国産第1号「アトム110°スライド丁番」

そんな状況下で1969年(昭和44年)、当社は日本で初のスライド丁番国産化に踏み切りました。

当時としてはかなり無謀と思えるチャレンジでしたが、3代目社長の「近い将来、家具や住宅の工業化がさらに進み、それに対応できる丁番が必ず必要とされる」という読みと、「よその国で造れるものが、日本で造れないわけがない」との信念のもと、断行するに至りました。

当初は失敗や苦労の連続でしたが……

数年後に某大手住宅メーカーで採用になり、また1980年(昭和55年)頃からはパーティクルボードの普及により、スライド丁番の使用量は大幅にアップして今日に至っております。



国産初のプロパー品「アトム110°スライド丁番」

スライド丁番進化史

スライド丁番はこの半世紀の間に、調整機能は前後左右の2方向調整から上下が加わって3方向調整へ、扉の吊込み方法は工具による吊込みから工具不要のワンタッチ式へ、さらにデザインやコストダウンなど、大幅な進化をして来ました。

その歴史と進化を、アトムのスライド丁番を中心に見てみます。

1970年代のスライド丁番

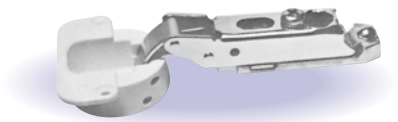
代表的な商品

アトムPM95シリーズ

特徴

- 調整機能は、前後左右の2方向調整
- キャッチは、板バネタイプ(リンクキャッチ)
- 座金は、長座が主流(A座タイプ)であった

PM95シリーズ



1980年代のスライド丁番

代表的な商品

アトムFシリーズ、Cタイプ、
アトムDX150、DX170

特徴

- 調整機能は、前後左右に加え、上下調整ができる3方向調整タイプが登場
- キャッチは、フレームに内蔵されていて外から見えないコンシールドキャッチ
- 座金は、システム座(三角形のB座、四角形のL座)が出来上がる
- 広角度開き丁番が開発された

Fシリーズ



Cタイプ(DC100°)



DX150



1990年代後期以降のスライド丁番

代表的な商品

アトムCR100シリーズ

特徴

- Cタイプにレバー着脱機構を搭載したタイプ
- 本体、カップ、座金ともプレス製で大量生産コストダウン化されている

CR100シリーズ



レバー着脱とは

